

風の記憶

井坂康志（編集者）

I

2015年9月、私はワルシャワから北東100キロほどのトレブリンカにいた。果てしなくつづく森で、鋭利な石碑が無数にある以外何も目に入らない。

心の芯がぶち割られたような、一滴残らず精力が吸いとられた気分だった。無数の見知らぬ亡霊たちがありとあらゆる方向から不気味なメッセージを放つようだった。

ワルシャワを襲った魔物の足音について考えた。ホテルのベッドで毛布にくるまり、眠りに落ちようとしたとき、何かが私を呼んだ。

四半世紀も前、私と多田さんは馬場下町の信号が変わるのを待っていた。高田馬場方面までいくつもの古本屋を横目に見ながら歩いた。名前は憶えていないが、アメリカンスタイルのいかかわしい洋服屋があった。

多田さんの口調はどことなく断定的な場合と、あえて留保したい場合とははっきり分かれていた。



西早稲田の今はない中華料理屋でスープをれんげですくっているとき、多田さんがカウンターに無造作に置かれた油まみれのスポーツ新聞を指さして言った。

「やりきれないね」

目をやると沖縄での米兵による暴行事件の記事だった。思わず多田さんの顔を見て、何を思っているのかを探ろうとした。多田さんは何も言わなかった。後になって多田さんが沖縄を研究テーマに定めたとき、私はふとあのときの表情を思い出した。さりげなくめぐらされた糸のようなものを感じた。

ひどい寒気がする。歯の根ががちがちいう音が聞こえた。

ホテルの部屋を暖かくする。頭まで布団をかぶる。零下を超えているだろう。昼に行ったトレブリンカ強制収容所跡と、ユダヤ人墓地の底冷えがまた戻ってくる。思い出すだけであの寒さが直下型地震のように全存在を突き上げる。

多田さんの歌が聞こえる――。そう思った。錯乱した時代から送られて来た整然とした音律だった。

難しい話にはじまり、必ず馬鹿な話で終わった。飲み会の帰りに、二人で穴八幡の境内で語り明かしたこともあった。何かにつけて多田さんは私を優先的に誘ってくれた。こんな先輩を持てたことが誇りだった。

暗い時代だった。陽は照っていたのかもしれない。それでも、頭上には曇天が広がっている気がしてならなかった。50センチほど頭上にぎぶとん大の黒雲が浮かんで雨を降らし

ているみたいだった。

92年の5月大学に入って間もなく、尾崎豊が死んだ。尾崎がどれくらい私たちの心をつかんでいたか、今の人たちにはうまく想像できないに違いない。尾崎はあの時代の不安感を歌った。

不安の最たるものは、なぜ自分が不安なのかが分からない不安だ。

私が多田さんに出会ったのは、「あの時代」だった。1992年、20世紀最後の10年。十年一昔とすれば、昔の昔、さらにそのまた昔のことだ。

不安に衝かれるように、私は急いでサークル誌を手にとり、いくつかの音楽サークルに目をとめた。「わせだフォーク村」はその一つだった。名前の古びた語感が気に入った。

私が多田さんについて記憶する最初は、当時まだあった第二学生会館音楽室で、ギターケースを左手に、濃紺のスーツを身にまとった姿だ。多田さんは大学三年生で、これからゼミの面接に行くのだと言っていた。ネクタイはどことなく似合っていなかったし、顔つきは賢そうだったけれど、私がいままで北関東の故郷で見たことのない種類の顔だった。この二つが私が多田さんに対して持つことになった最初の印象だった。



ともかく、私は92年の4月だか5月だかのある日に多田さんに出会ったのだ。私の前に現れた多田さんは、現在の多田さんとはある意味で違っている。まだ、その鋭敏で強い自我にふさわしい外貌を形成しつつある頃だった。

ぼんやりと春特有の霞が立ちこめて、第二学生会館の窓からはわりと間近に新宿を見下ろすことができた。バブル崩壊後の東京は、いたるところに仕掛けり中のビルがあり、頂上には例外なくぼつんとたたずむクレーンが、未遂に終わった繁栄にうつむいていた。

「失われた時代」を図像化したらちょうどあんな具合になるだろう。

あの頃私は傷ついていた。だが、どこの世界に傷ついていない若者が存在するだろう。自ら負った傷をどうすれば癒せるかばかりに頭をめぐらせ、その一つが語ることだった。ギターをもって歌うことだった。さわやかに表現すればテニスやスキーといったことになるだろうが、やっていることに大差があるとは思えない。

尾瀬にサークル合宿に行ったのはその年の夏のことだ。大半の時間はギターを弾いたり結論のない議論をしたりして過ごした。多田さんの口からおびただしい数のテーマについての話が出てきた。

そういえばあの頃、いつもどこからともなく煙草の匂いがしていた。多田さんは煙草を吸わなかったのだが、いつも煙草の匂いとともにその時代はあった。

あの頃にしてすでに政治はさほど興味を引かず、思想哲学もスタイリッシュなものとは見なされなかった。眉間に皺を寄せることがカッコいいという少し前の風潮は、圧倒的なバブルですっかり洗い流されていた。

日本社会は自らが思う以上に未熟であり、これまでの自己像からこれから目指すべき自

己像との間を大きく揺れ動く前段階にさしかかっていた。

私は時折、自分の生きる時代を呪いたくなるときがあった。あまりにつるりとしていて、つかみどころがない。反抗すべき対象もなければ、受け入れるべき価値もない。今にして思えば、それでも世の中はきちんとそれなりに機能してはいたのだが――。

考えてみれば、多田さんも私も遅れてきた世代だったのかもしれない。率直な言葉を交わすことなど生まれてからなかった気がする。まして愛された記憶などない。多田さんと言葉を交わすようになってから、いかに自分が精神的に飢えていたかを知った気がした。

私自身、何者かになれるだろうかという不安と、何者にもなれないだろうというあきらめのなかにいた。街を歩くときにガラス張りのビルに映る自分の姿が、そのたびに別人になっていくような気がしたのをはっきりと覚えている。

合宿のある日の午後、多田さんが、みんなで尾瀬沼をハイキングしようという計画を立てていたのを知った。宿（確かアップルといかいう名前だったが、今はさすがにないだろう）にマイクロバスを頼み、けっこうな昼食まで用意させた。かくして、私たちはギターをケースにしまって、十数名が一团となって多田さんの引率で果てしない湿原の板の道を歩いていった。

私たちは羽化したばかりの全身を湿らせた蟬のように、世界の空気に体をなじませる必要があった。蟬につかまる木が必要なように、居場所がなければならなかったのだ。

あるいは現代の学生にとっては奇妙に思われるだろうが、当時大学における充実度の第一は、居場所を見つけることで8割方決まっていたと思う。

自分の居場所を自分で選んだのだという自覚がそのとき急に私の心をとらえた。多田さんは居場所そのものだったのだ。多田さんがいればいつまでも語れそうに思えた。ユグヤのシナゴグで交わされる連祷みたいに、多田さんと私の間の会話には終わりというものがない。

何を話したのだろう。いろいろありもするし、何もなかったようにも思う。いや、何を話したかなど問題ではない。語ることが、というより語ることだけが問題だったのだ。

II

自信のようなものを感じた。きっと自分はこの世界で生きていけるだろうという気がした。

多田さんが笑うたびに、振動が私のなかの何かを共鳴するのが感じられた。多田さんが何かを言うたびに、それが心に隠された宝の所在を示すように感じられた。ずっと遠くにしか聞こえなかった太鼓の音を、まさに自らの手で叩いている感覚だった。

多田さんがあるときふと図書館で漏らした一言がある。「時は残酷やで」。

時間の過ぎるのはあまりに流行すぎる。

10年がたった。私は社会人になっていた。20代後半から30代前半にかけて、何をしてもうまくいかない時期を私は過ごした。

念願かなって出版社に務めてはいた。が、仕事は破綻しており、組織の問題にさんざん悩まされた。首になりかけたとかいうことではない。むしろ首にしてくれていたらもっと問題はシンプルだったろう。ただ明けても暮れても仕事が自分を追いかけてきて、ぎりぎりの状況に追い込まれていた。自分が自分でない感覚だった。いつも体に合わない服を着

させられている感覚だった。

就職して数年ほどで私は結婚していた。翌年に娘ができた。妻は安定した公務員だったが、出産を機に仕事を辞めていた。

人生の変転に翻弄された。人生は謎に満ち、もはや自身の手にさえ負えるものではなくなっていた。しかも根本的な問題に対して、はっきりした態度をとらずにきたつけのようなものが、不吉な督促状のように静かに私に回ってきたのだった。

今いる仕事で自身を生かす見込みはないように思われた。何の熱意も湧いてこなかった。どうにガソリン切れのエンジンを吹かすように、ただ自分を痛め、損なうだけだった。熱意のないところで稼ぐ金なんて時間の無駄だと思った。金銭に関してはとにかく最低限食べていければよかった。場合によって食べていけなくてもよかった。食べられなくなるのなら、食べずにいるだけだと思った。

考えれば、それまで自分以外に責任など負ったこともない若者が、急に社会の責任を負い、妻子を養うよう命ぜられたのだ。

給料は決して安くはないし、地位も安定しており、勤務時間は恵まれていた。だが、私は重責に押しつぶされてひたすら絶望していた。だが、少なくとも当時は会社が自らの望む場ではまったくないことを毎秒じりじりと感じ続けていた。このまま居続けるのは死ぬよりも忌まわしいことに思えた。

大学時代あれほどまでに理想的に思えた仕事、勉強しながら給料をもらっているようにさえ思えた仕事だった。

現実とは違っていた。私は編集者として一流だったことはない。おそらく二流であったことさえない。その事実がいつも胸の奥を灼いた。

私は自分で書きたかったのだ。もしそうできないのなら、私の人生は終わってしまったも同然である。自分が選んだ道を擁護する方法があるとしたら、現実的な選択にできるのは、編集の仕事をしてこにして、隣接するもう一つ活動をするほかはない。もう一つの回路を自分の手で作らなければ、たちまち内部の熱で溶解してしまうだろう。

私は会社人として現実的でありたいと思ったことはなかった。私は私として現実的でありたかったのだ。

私が求めていたのは、共感できる何かだった。共感できる世界に分け入って、自分をそのための道具に使いたかった。そしていろんなことを探索してみたかった。共感の器官さえ作動していれば、私の行くべき方向を自然に教えてくれるに違いない。

そう考えたのは 20 代も終わりの頃だった。ずいぶん遅く気づいたと思われるかもしれない。私自身もそう思った。いい年をして、家族を養う義務を負った自分が、自分が何者かを知らうともう一つ、できたらもう二つの世界を、現状を維持しながらつくっていかうと考えたのだから――。

まず考えたのは、好きなものについて書くことだった。

2002 年だった。大学入学から 10 年。今あの頃のことを思い出し、自分がどんな気持ちでいたかを思い出すのは私にとってさほど難しいことではない。1 月 15 日、私は多難な自らの未来を思い、小さなため息をついた。それからさらに未来を生きている可能性のある自分にあてて毎日を記していこうと思った。決意というには軽かったが、思いつきよりはいくらか重いものだったように思う。

自分自身の気持ちを自分で問い始めても話はやっかいになるばかりで、だんご結びにがっちりからまった心のたこ糸にはほどけそうな気配さえなかった。だが、日々の気持ちや行動をそのまま書いていけば、深く考えるまでもなく、素直になれるように思われた。

実際に書く習慣は 15 年近く経った今も続いている。すでにそれは私の精神の大切な一部と言ってもいい。

もう一つとった私の行動は大学院に入ることだった。しかも、仕事を続けながらだ。私は両親が教師という型にはまった中流階級の過程に生まれ育った。子供の頃は貧しくも豊かでもなく、絶望的な欠乏に悩まされることはなかった。

だいたいの夫婦はどちらかが浪費家なら、どちらかが吝嗇というのが通り相場だが、私の両親は二人とも判でついたように吝嗇だった。子供の頃戦争による貧困を骨の髄までたたき込まれたせいで、金がないという強迫観念が魂の深奥にまで刻み込まれていた。そして二人とも戦争による家族の傷をそれぞれ似た形で癒そうとして、ことごとく失敗していた。戦後の貧困の記憶は両親の精神を呪縛していたのだ。

私は金がないというイデオロギーのただなかに生まれてきた。はじめに貧しさへの恐怖という痩せ地があり、私が後から綿毛で飛んできたたんぽぽみたいにささやかな根を張ったのだ。世は高度成長を経たばかりか、とんでもないバブルに浮かれているというのに、二人はどうしてもそれが信じられずにいた。そのせいか私のなかにはいつもお金にまつわる大きな不安があった。

だが、実のところそんな両親と過ごす子供時代は私にとって苦しいものだったかというところではない。二人の粘り強さには今なお何かしら心捉えるものがある。二人は苦勞して学んだ経験を自分たちの小さな王国のなかで完膚無きまでに具現化した。無邪気なまでの真っ直ぐさがある、それが両親を世間に対して一ミリも譲らない頑固な人間にしていた。結局私も彼らの貪欲なまでにストイックな人生観から現在自覚している以上に影響を受けているのだと思う。

公務員だったから、安定した生活は当然だった。貧しさと安定は両立するものだ。誰もが大人になれば同じ生活をさしたる苦勞もなく営むのだと漠然と思っていた。ところがそんな暮らしというものがかなり得がたい恵みのだと気づいたのは自分が社会に出てからである。大学をすでに出ているからには、後は自分の経済力でやっていくほかはない。会社を辞めてしまったら、生活が破綻するのは目に見えていた。

あのときとった私の行動をどう説明したらいいのか、いまだにわからない。ふつうなら、同僚はみな手堅くふるまい、堅実な道を歩んでいた。だが、当時の私には向こう見ずな行動をとらないなどというぜいたくはおよそ許されなかったのだ。

あるとき私は新神戸駅近くのホテルのラウンジで、関西学院大学の若手の助教授と会う機会を得た。何かの出版企画の共著者であったと思う。私はそんなふとした偶然というのが、自分の手でたぐりよせたかどうかとは関係なく、どれほど人生に影響するかをひしひしと感じる。

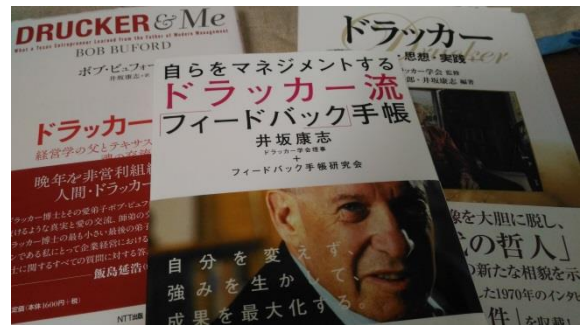
その助教授は博報堂のディレクターから大学に移籍した人だった。会社を休職して東京大学の大学院で修士をとった経験を話してくれた。そのきっかけとなったのが、あるときふと「自分はお金に興味がない」ことを悟ったからだということだった。

その一言はまさに啓示の衝撃をもって私の魂を打った。当時、仕事はまったくうまくいかず、無為な時間が過ぎていくなかで、自分の持つ志向性と組織の泥沼の矛盾を解消するのはますます難しくなってきた。今まで自分が積み上げてきた、自分の人生を利する努力は何だったのか。だがそれも、金をめぐるイデオロギーにすぎなかったのではないか。いかに自分の魂は呪縛されていたか。

何だか、自分の魂の声を初めて会う他人の口から聞いた気がした。

私は自分の置かれた環境が恥ずかしくてたまらなかった。恥ずかしいだけでなく、こんな事態を招いてしまった自分の愚かさ自体が恥ずかしかった。

やがて私は一念発起してその助教授が在籍していた大学院の研究科に入学したのだが、それ自体に大きな意味があったわけではない。私はいまだ出版社の社員を続けていたのであり、独立するつもりもやり直すこともしなかった。それは——授業料を別にすれば——自前の賭け金を損なうことのないプロジェクトだった。



井坂さんのドラッカー関連の著作・仕事

III

ところで多田さんは大学院生の時に結婚し、早稲田の山崎荘という犯罪的に古ぼけた居場所を引き払い、浦安での新婚生活をはじめた。いろいろ苦勞もされたと思う。だがやがて多田さんの力は組織化され、明瞭な形をとるようになった。琉球大学に職を得て、沖縄に行くのだと聞いたとき、私はさほど驚かなかった。そして、あの学生街の中華屋の出来事を思い出した。

私は日本橋の出版社に務めて数年がたっていて、多田さんとは疎遠とは言わないまでも、年に一度会うかどうかという関係になっていた。それでも、張り巡らされた糸のどこかで多田さんの熱い息づかいを感じとることができた。きっと多田さんは自分自身を成就する旅に出るのだらうという気がした。その先に沖縄があることは、前もって定められたこのように思われた。

2004年の5月だったか、あるいは6月だったかもしれない。私はある知人の紹介で、沖縄の書籍の編集を担当することになった。著者は当時まださほど有名でなかった琉球新報の前泊博盛さんで、私の記憶違いでなければ、前泊さんの最初の本になったはずだ。

多田さんとの再会はこんな偶然から生まれたのだ。私としては沖縄にさほどの関心があったわけではない。前泊さんの企画がなかったら、一時停止していた多田さんとの物語が彩り豊かに再開することはなかっただろう。

ちょうどその頃、私は企画の関係もあって沖縄に数度足を運ぶ機会があった。先にも述べた通り多田さんは琉球大学の教職に就いており、博士論文をとりまとめている最中でもあった。「本を書きたいのだけれど、力を貸してもらえないか」と聞かれた時、私は次に求めているものを知った。どんなものを考えているのですかと聞くと、沖縄イメージをコンセプトに、自分の学問と実践で持てるものをすべてを注ぎ込む一冊にしたいのだと多田さんは答えた。

当時私は自分の仕事をするだけでもかなり精いっぱいだったのだが、時にこの種の吸引

力はあらゆるものを棚に上げさせてしまう力がある。こうして、多田さんと私の第二章ともいえる新しいストーリーが、本を作るというプロジェクトを経由して具現していった。私は多田さんとともに走り始めたのだ。

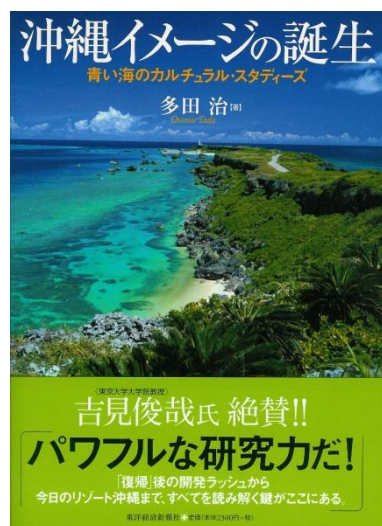
私が当時多田さんにお伝えしたのは、書きたい本ではなく、読みたいような本を世に送りださなければならないということだった。もちろん内容やスタイルは多田さんのものでいい。借り物は通用しない。私が何より求めるのは、世界とはこういうものだという何かに凝り固まった枠組みをやさしくほどいてくれるような本だった。私たちの国や社会、文化などの内部で働いている神秘的な力の一端を説き明かしてくれるような本である。

多田さんとのやりとりは、実にスリリングなものだった。これまで取り組んだなかで、かくもソリッドな刺激を受けたものはそうない。

多田さんは東京に戻るとしばしば私を訪ねてくれた。私は本という形を使って、多田さんをどう世に送り出せるかを考えた。私は多田さんという物語を求めていた。多田さんという人、フィジカルなスタイルを求めていた。多田さんという人を一冊の本にするなら、最後の一語まで息をもつかせず読ませてしまうパワフルな物語である。

多田さんはしばしば可能態という言葉を使う。おぼろげな記憶では、ゲーテの言葉ではないかと思うが（間違っているかもしれない）。いずれにせよ、多田さんの内なる人生をよく物語っている。私たちはみな自分を世界の一部と感じている。一方で、私たちには自分を可能態の一部とも考えている。現実とは違う形でそれぞれの生の炎が燃えている。それらが、間接的なかたちで、この世界を現実のものとしている。『沖縄イメージの誕生』で語られた多田治の現実である。

原稿を見ながら、しばしば私は多田さんが内に秘めた情熱を思った。多田さんの現実感覚はこのうえなく激しく、私たちの感官を刺激し、圧倒し、再創造する。それはやがて、自他を区切る可能態のボーダーラインさえ消し去ってしまう。それは多田治の視覚そのものである。クールに構えながら、灼熱の視線で現実と想像の境界線を焼き切ろうとしている。



井坂さんの編集で世に出た初の単著

IV

多田さんと過ごしたあの時代は、はっきりと実在していた。流れ去ってしまったけれども、記憶は生きている。多田さんとさらに 10 年近くぶりに再会したのは真夏の神田の喫茶店だった。正午前の混み合う直前の時間帯だった。つい先日のことだ。

神田の喫茶店の隣には数年前には小さな街の書店があった。今はセブンイレブンになっている。時代はさらに流れたのだ。多田さんの髪はきれいに刈りそろえられ、風貌は大学教授にふさわしくなっている。ときどき話しながらちらりと相手の目を覗く癖もそのままだった。

そこで、光栄なことにこの文章を書かせてもらえることになったわけである。



書かせてもらったのはいいとしても、正直なところ、何らの助言もできない。示唆さえできない。せいぜいこのような何のプロットもない駄文しか寄せられない。でも、生きるということはたぶんそういうものなのだろう。少なくとも私にとっては。

思うのは、大学時代の私——恐ろしいことに四半世紀も昔の私たち——がどんなことを考え、どんな言葉を口にしていたのかがわからなくなっているという事実である。たまにその頃読んだ本をぱらぱらとめくったり、余白の書き込みを見るにつけ、自分はなぜこんなことを重要と考えていたのかがどうしてもわからない。

それでも、あの頃のさまざまな息遣いだけは記憶にとどまっている。そして、多田さんと交わした語りのなかに、私という存在の秘密が含まれている。それを繊細に聞きとるだけの耳だけが、今私に必要なものだ。

私は多田さんの思い出を経由することで、当時の自分の思考にアクセスできる。多田さんという回路をたどることで見えて来る風景というものが確かにある。

多田さんは今、一橋大学の教授になり、さらに活動の熱は高まっている。けれども私にとって多田さんはどこまでも多田さんなのだ。

私は断言したいのだが、記憶とは口にされた言葉以上のものだ。何も私は、思い出が誰にとっても美しいと言いたいのではない。大切な記憶というのは、言語を紡ぎ出す器官よりもはるかに心の近いところに置かれているということだ。

それは風に似た何かであるとしか今は言えない。